

2017 年度 第 34 回 日本人間関係学会「関東地区会」研修会報告

本年度テーマ：「支援者としての困難と克服」
－自分自身が挫けないための方法を見出す－

「ヒューマンリレーション・スキルトレーニング(Human Relation Skills Training)=HRST」

第 32 回研修会テーマ 「乳幼児期から老年期までの人間関係

～相手との空間・関係づくり～

- I 開催日時 : 2018 年 1 月 20 日(土) 14 時～17 時
- II 開催場所 : 越谷市中央市民会館
- III 課題提供 : 岡田昌子
- IV 司 会 : 杉本太平
- V 記 録 : 矢吹知永
- VI 参加者 : 7 名

<趣旨>

高齢者や心身に罹患している人々の立場に立つということ程難しいことはない。良かれと思って支援しても人は十人十色で、相手を怒らせてしまい、挫けてしまうこともある。そこに相互関係を創造していく難しさがある。支援する人、される人との壁を越え、お互いが気持ちよく居られる空間・関係づくりについて、様々な事例を通してより良い方向性を探る。

<キーワード>

咄嗟の折の人間関係・世代間ギャップ・常識・良識・モラル&余計なお世話・健康度

<展開> (話題提供者：岡田昌子)

I 部 テーマに基づく話題提供(14:10～14:20) : 話題説明・事例検討

IT や AI 社会へと変遷しつつある中、人々が機器に振り回される時代になりました。善し悪しは別にしても、世の中は物事の全体像を把握することも理解することもなく、人々の不安や優しさの心を置き去りにしたまま未来へと猛スピードで進んでいるように思えます。それは、人々の思考や言葉、感覚等が組織や仲間、年齢、趣味等で分断され、固定され、そのグループ内だけの価値観が良しとされ、人々への気配りが不必要となり、より良い疎通が第三者との関係において困難になっているのではないかと思えるほどです。特に若年者と高齢者間のギャップは、咄嗟の折の人間関係において余計なお世話になりかねず、また危険を伴うこともある昨今に、高齢者や健康弱者が支援者であっても心身が傷つかないように、より良い人間関係の創造が可能となる手立てを、身近な日常に生じがちな事例を想定しながら咄嗟の折の対応について人間関係士としての実践を通じた学習を目指します。

[事例の説明]

- 1) 外出先でのモラルについて: 若者や子どもの親への対応
- 2) 電話への対応
- 3) 心の傷や怒り、恐怖が残る対応

[資料の説明] 中村秀明論説委員、中沢新一人類学者、佐藤愛子作家、平野啓一郎小説家の言葉集から
平野啓一郎(朝日新聞から)

人は相手によって見せる顔が変わる。相手が変わるごとに違う自分、つまり「分人」がいる。職場での分人、恋人との分人、趣味での分人、どれも本当の自分。一人の間人は「分人」の集まりで、その構成比率が個性である。複数の分人を生きることによって不確定な未来に柔軟に対応し、現実がもたらすリスクを軽減する必要性あり。(分人主義:『私

とは何か』講談社現代新書)

関係学理論の役割行為法を「分人」に喩えてみる—(杉本会長)

平野氏が表現した「分人」という概念は、心理劇では「役割行為」という概念として捉えられる。人はいつも何かの役割を担いながら生活しているといえるが、それを関係学理論で整理すれば、人間存在の基盤となる「自己」・「人」・「もの」を表した「自己構造」における「人」の領域を表したものともいえる。つまり、人は現実の生活の中で様々な役割(父・母・子・企業人・学生…etc)を担いながら生活しているが、「分人」が多様にある人というのは、自己の中の「人」の要素がたくさんある、ということにもなるだろう。その要素が多様にある人は人間関係における振舞い方や関わり方も柔軟であり、他者との関係や生き方としても豊かになる可能性が高いと理解できる。

II部 バズセッション(14:20~14:55)

- ・自分も、見て見ぬふりをしていることが多い。言っても理解してもらえないかどうか分からない。先日も、売り物の鞆を店から持ち帰る人がいて、とっさのことで声をかけられなかった。駅の改札でも不正通過する人を見かける経験が多くある。
- ・アイドルブアンの友達同士なのか、無賃乗車の助け合いが増えたという記事も見た。
- ・先日、飛行機の中で30分ぐらい泣き続けている赤ちゃんがいた。みんなチラチラ見ていたが、何も言わなかった。耳栓をしている人もいた。母親は赤ちゃんのあやし方を知らないのかも知れないと思った。
- ・最近、弱者を守る風潮があるので、それを良しとして周囲に配慮しない母親が増えてきたように感じる。周囲に配慮しないで自分だけは守ってもらおうとする高齢者も多いと感じる。
- ・子どもと病院に行った時に医師の横柄な対応に驚いた。納得できる返事はもらえず。「逆恨みされるかもしれないから」と逆に子どもから注意された。大変な思いをして来院した意味がない。
- ・横柄な医師によくみられることとして、患者が納得するような説明をするという行為が抜けているように思う。詳しく説明してもらえただけで患者は気持ちが楽になるのに、結果を伝えるのみの短い返答で終わらせてしまう。患者の気持ちに寄り添う為の医師の研修はないのだろうか。患者が不快に思った時にどのような言葉がけがいいのか分からない。
- ・自分は合わないな、と思った医師には診察してもらわないようにしている。同じ病院ならカルテは電子化されているのでどの先生に変わっても心配ないので。病院が合わないと思ったら病院も変えている。地域の人にも聞いている。不快な思いをしないよう選ぶ権利は自分にあるのだと思うようにしている。
- ・今、話題に出た医者は、「もの」の領域が強い人。また「自己」が強い人がいて、相手の気持ちを忖度することをしていない人もいる。「人」としての振る舞い方が狭くて柔軟な考えが出来ない人や、偏りの強い人とどのように付き合うことができるか、ということが今回のテーマなるだろう。

III部 行為法(監督チーム:岡田・杉本)(15:10~16:10)

1 課題の整理

・振り込め詐欺:詐欺師の意図としては、危機状況を演出し、自分を見失わせ、正常な判断ができないように仕向けて巻き込んでいく(危機状況に内在化させて相手の意図に即して行動させるような関係状況)。ここでは、危機状況の外に目を向け関係をつくる(第三者と連絡を取る・回避するなど)、「犯罪」という関係を断ち切る必要がある

・電車の中において周囲に配慮しない人:行為法で考える

・泣き叫ぶ赤ちゃんに対して、うまくいかない母(内在・外接)、関与しない母(外在)、赤ちゃんに積極的にかかる母(内接):行為法で考える

2 行為法

A. 電車でスマホに夢中になっている人や優先席で要支援者に席を譲ろうとしない人への関わり

・その人が状況に気が付くようにかかわる必要がある。対立するかかわりではなく、その人と状況を橋渡しする役割。

・状況が見えていても見えていないような振りをしたり、寝た振りをしている人がいる。→その人にはかかわらず、他の状況が見えている人にかかわるか、自分自身が要支援者に関わり続けるという方法もある。

・要支援者の荷物を持ってあげようとする場合、自分の「つもり」が相手のニーズに合っているか確認することも必要なのでは

B. 電車の中で泣いている赤ちゃんと母親

・支援者があやして泣き止む:赤ちゃん→心地よい感じ。母親→受け止める

・支援者を無視:赤ちゃん→周囲に誰もいない感じ。母親→はじめは気が付かないが、気づいてからはうるさいなという反応

- ・支援者があやしても泣き止まない: 赤ちゃん→母親は困難を感じつつ様々に試行錯誤して関わろうとする。母親→だんだん焦ってくる、かみ合っていない

C. AとBの事例へのかかわり方をいくつか実践して、より良い関与の仕方を検討

IV部 シェアリング(16:10~16:40)

- ・10年20年前の時代と変わってきていることに痛感することが多い。近所の人とすれ違っても、挨拶をしてくれる人が少なくなった。若者だけでなく高齢者もそうで、かかわりが持てなくなってきた。
- ・人とかかわりにおいて、自分がこうしてあげたいと思うことでも、相手が自分が思ったようにとってくれないこともあることが分かった。かかわり方の工夫の仕方を学べた。
- ・相手に自分の考えを伝えること、相手の気持ちを確かめること、などのコミュニケーションをとれるように、子どもを育てていかなければならないのだと思った。
- ・振り込め詐欺に対しても、インターネットなどでの買い物などが広まったことが関係しているのではないだろうか。ネット依存社会になって現実的な対応力が弱まっている。
- ・赤ちゃんを無視する母親役をやってみて、その心の底には、ひっそりと孤独感が根をはっていることが体験的に理解できた。
- ・泣いているのを放っている母親を見ると、孤独を感じ、どうにかできないかと思うのだが、なかなかうまくいかないことが多い。いくら見えていても何らかのかかわりがないと支援することは難しいのかもしれない。
- ・人にかかわられると、母親はどんどん追い込まれ、結果的に相手をシャットアウトする人はいる。
- ・その場でできる支援もあるが、うまくいかないこともあるだろう。
- ・困っているサインを出している人にはかかわれるが、そうでない人にかかわるのは難しい。

V部 まとめ(16:40~16:50) 会長 杉本太平

今回の研修は、「人

としてのふるまい方に偏りがあって、こちらからの関与が困難なケースを中心に、理論的な理解と実践的・体験的な理解の両方が深まり、内容の濃い研修であった。メディア依存社会になりつつある現代日本の現状みると、家族においても社会においても対面的なコミュニケーションや人間関係はどんどん減少し、狭まりつつあるといえる。「人間関係力」が育ちにくくある現状の中で、対人関係的に困難を抱えている人は今後増えてくるものと考えられる。

人間関係士としても、このような困難感を抱えた人への支援や偏りのある対人関係を結ぶことしかできないでいる人への関与や周りの人や状況との橋渡しをしていく役割をどのように取り得るのかを課題にしていくことが望まれる。

<連絡・問合せ先>

関東地区会 杉本太平(宇都宮共和大学)

Eメール taihei_sugisan@yahoo.co.jp

FAX 番号 048-977-8567

<次回 定例研修会のご案内>

開催日:平成30年3月10日(土) 14時から

開催場所:越谷市中央市民会館 第11会議室(予定)

※次回は研修会と総会を開催します。

次回会場:越谷市中央市民会館

住所 343-0813 越谷市越ヶ谷四丁目1番1号

代表番号 048-966-6622

アクセス 東武伊勢崎線越谷駅東口より徒歩7分(東口前通り直進 越谷市役所前の建物)

※当日迷いましたら、杉本携帯(090-4393-1305)にご連絡下さい。

